



北大構内の遺跡

昭和58年度

1985

4

北大構内の遺跡

昭和58年度

4

序

北海道大学構内の埋蔵文化財調査に関する昭和58年度の年次報告が刊行される運びになった。あらゆる建設工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認することから作業を開始する北大方式が順調に進んでいることを、まず喜びたいと思う。調査地点19箇所、工事立会16回という数字は、他大学のキャンパスではあまり見られないといってよい。こうした発掘と、その間隙を利用して実施されている分布調査から、本学の地下に眠る古代集落の様相が、次第にヴェールをぬぎはじめてきている。この北の大地、しかもわが北海道大学の位置するところに先住文化が明確に存在していたという事実には、文化的立地条件についての歴史的因縁を覚えてならない。埋蔵文化財調査室のスタッフから聞くところによると、構内に存在する遺跡のはば60%の位置が確認された、とのことである。本学における建設計画の策定に資するところが大であろう。

こうした調査の結果得られた資料は、整理作業の終了したものから、順次、埋蔵文化財調査室に付設されている小展示室に陳列され、誰でもが見学することができるようになっていく。学外者も含めて、おおいに利用していただきたい。

なお、毎回のことではあるが、限られた予算と僅かな人員で奮闘されている埋蔵文化財プロジェクト・チームと調査室の各位の努力に対し、心からの謝意を表する次第である。

昭和60年1月30日

北海道大学長 有江幹男

目次

序	3
Summary	5
第I章 昭和58年度事業報告	6
I-1 調査及び保存事業の実施	6
第II章 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地区 の調査	12
II-1 調査の概要	12
II-2 調査の結果	14
II-3 小括	15
第III章 薬学部受水槽建設予定地区の調査	16
III-1 調査の概要	16
III-2 調査の結果	19
III-3 小括	23
まとめ	24

《図・表目次》

第1図 北大構内遺跡・遺物採集地点分布図	7
第2図 ポプラ並木東地区の子備調査図	9
第3図 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地の 位置図	12
第4図 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地の 発掘区と遺物の分布及び地層状況図	13
第5図 薬学部受水槽建設予定地の位置図	16
第6図 薬学部受水槽建設予定地と付近の地形図	17
第7図 薬学部受水槽建設予定地出土遺物	22

《写真目次》

写真-1 附属図書館増築予定地区の調査	6
写真-2 恵迪寮跡記念碑設立予定地のトレンチ	6
写真-3a 外国人教師宿泊施設建設予定地区の遠景	8
写真-3b 外国人教師宿泊施設建設予定地の トレンチ掘り	8
写真-3c 外国人教師宿泊施設建設予定地の 子備調査終了間近	8
写真-4a ポプラ並木東地区の遠景	10
写真-4b ポプラ並木東地区の子備調査	10
写真-5 医学部標本庫建設予定地の調査	11
写真-6a 農学部附属演習林実験研究棟予定地の遠景	14
写真-6b 農学部附属演習林実験研究棟予定地の近景	14
写真-6c 同発掘状況	15
写真-6d 同調査の様子	15
写真-7 農学部附属演習林実験研究棟予定地出土の 攪文土器片	15
写真-8 同地区代替地出土の攪文土器片	18
写真-9 薬学部受水槽建設予定地の地層	19
写真-10 同地区黒色ベルト直下から出土した 粟の破片	19
写真-11 薬学部受水槽建設予定地出土の遺物	20

Summary

1. In the 1983-1984 year, intensive excavations were undertaken at two locations on the campus, one for a new building to house the offices and laboratories of the Experiment Forests, Faculty of Agriculture, and the other for the projected storehouse for hazardous chemicals, which belongs to the Faculty of Pharmaceutical Sciences. Potteries and stone artifacts of the Satsumon Period were excavated at these locations, but no archaeological structures were discovered.

2. Archaeological testing was carried out at other seventeen locations, and prehistoric materials were collected at two of them; post-Jomon materials from the area east of the rows of poplar trees, and Satsumon artifacts from the place where the University Auditorium is projected.

3. Further investigations are planned at the two localities mentioned above for the 1984-1985 academic year.

(Translated by Hiroaki OKADA)

第 I 章 昭和58年度事業報告

1-1 調査及び保存事業の実施

(1) 昭和58年度に本調査を行った地区は、以下に記す2個所(第1回図①、②)であり、詳細は第Ⅱ・Ⅲ章に示してある。

① 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地区

② 薬学部危険薬品庫建設予定地区

(2) 昭和58年度に予備調査を行った地区は、以下に述べる17個所(第1回図③～⑭)である。

③ 附属図書館増築予定地

▶ 予備調査期日 / 5月9日～5月19日

▶ 面積 / 1,330㎡

▶ 方法・所見 / 図書館東側はサクシュコトニ川、正面玄関(南側)前および西側はサクシュコトニ川左岸部に相当する。このため現図書館建設の際すでに大量に土盛りが行なわれている。したがって調査はこの盛りを重機によって除去し、後に人手による精査を行なった。その結果、正面玄関前の擾乱を受けた部分から、縄文時代の土器の小破片2点を検出したにすぎなかった。

④ 学生寄宿舎(女子寮)建設予定地

▶ 予備調査期日 / 7月20日～7月22日

▶ 面積 / 515㎡

▶ 方法・所見 / 予定区域全体に4×4mのグリッドを設定し、それぞれのグリッドの内1×1mを人手により掘り下げ精査した。その結果、遺構、遺物とも発見されず、本調査の必要はないとの判断に至った。

⑤ 恵迪寮跡記念館設立予定地

▶ 予備調査期間 / 7月23日～7月24日

▶ 面積 / 32㎡

▶ 方法・所見 / 予定地域内に幅1m、長さ8mのトレンチを南北に設定、人手による試掘を行なった。地表下1.5mまで掘り下げたが、遺構、遺物は検出されなかった。

⑥ 文学部車庫増築予定地

▶ 予備調査期日 / 8月27日

▶ 面積 / 14.4㎡

▶ 方法・所見 / 人手による試掘を行なったところ、現地地表下1.5m掘り下げても覆土が続いていた。予定されている車庫は、地表下15～20cmの簡易舗装であるため予備調査を打ち切った。

写真-1 附属図書館増築予定地区の調査(西南からみる)

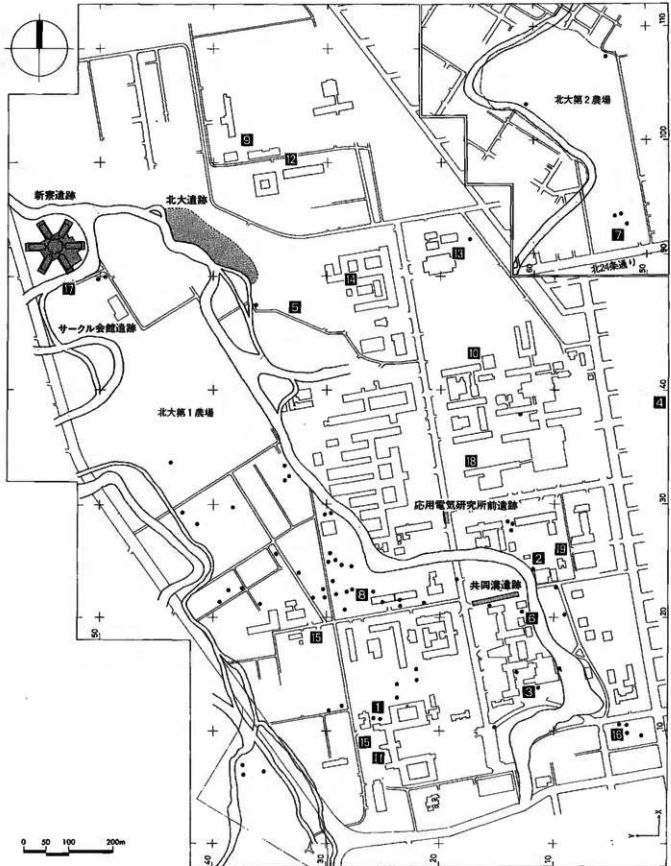


写真-2 恵迪寮跡記念館設立予定地のトレンチ



第1図 北大構内遺跡・遺物採集地点分布図

※图中、黒田角の番号は、調査地区を示し、●は遺物採集地点を示す。
※图中の番号は、第1章1節の調査地区に対応する。



外国人教師宿泊施設建築予定地

▶予備調査期日/8月29日～9月28日

▶面積/1,690㎡

▶方法・所見/まず、人手による試掘を行ない土層堆積状況をしらべたところ、客土がかなり厚く掘削に時間を要するため、重機を投入することにした(9月6日→9月19日)。一方、それと並行して人手によるトレンチ掘りを行ない、遺構、遺物の有無を確かめる作業を続行した。その結果遺構、遺物は全く検出されず、したがって本調査等の必要がないとの判断に至った。

札幌団地給水基幹整備・ポプラ並木東地区

▶予備調査期日/10月3日～11月25日

▶面積/200㎡

▶方法・所見/学内給水基幹整備の一環として当地

区を縦貫する給水管埋設工事計画が立案されたのを受け、当地区内に埋蔵文化財が検出されるか否かを調査した。

調査は、給水管埋設路線上及びその周辺に人手によるトレンチやテストピットの掘削を実施した。

その結果、調査区南東部分を中心に、縄文時代の土器片、石器、剥片等が多量に表面採集されると共に、テストピットやトレンチ内の黒色土中からも同期の土器片、石器、剥片等が出土した。又、トレンチ内に土壌と思われる黒色土の堆積が1箇所みられた。

このように、当地区は縄文時代の遺跡であることが確かめられたわけであるが、給水管埋設に当ってはその性格上大幅な変更ができないため、

写真-3a 外国人教師宿泊施設建築予定地区の遠景(北からみる)



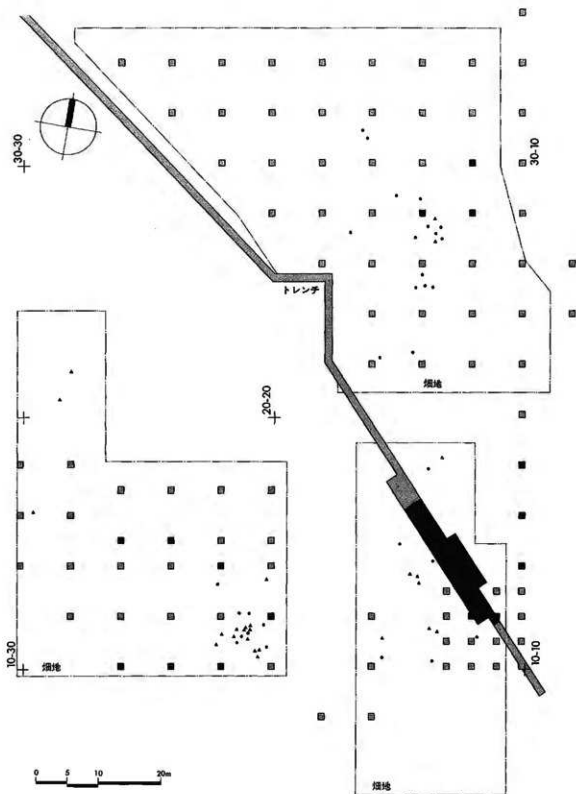
写真-3b 外国人教師宿泊施設建築予定地のトレンチ掘り



写真-3c 外国人教師宿泊施設建築予定地の予備調査終了間近(北東からみる)



第2図 ポプラ並木東地区の予備調査図



- ：土器片
- ▲：石器・石片
- トレンチ・テストピットの黒ぬりは、遺物が検出されたものを示す。

トレンチ内において処理することが、遺跡の破壊を最小限度にくいとめることが出来るものと判断された。給水管埋設の幅は約30cmに留め、工事には立会い注意を払うようつとめた。

一方、当地区は、次年度に本調査を行なうことになっている。

⑩農学部動物飼育室建設予定地

▶予備調査期日/10月13日～10月22日

▶面積/68㎡

▶方法・所見/東西に幅1mのトレンチ3本を設定、人手による調査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

⑪医学部標本保存庫建設予定地

▶予備調査期日/10月18・19日, 11月9・12日

▶面積/74㎡

▶方法・所見/当地区は、医学部の駐車場で盛土・舗装が行なわれている場所であったため、まず重機でそれを除去(10月18・19日)、後に人手による精査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

⑫農学部受水槽建設予定地

▶予備調査期日/10月18日

▶面積/135㎡

▶方法・所見/重機で積土の除去を行なったところ、旧建物基礎等が3m以上にわたって続いており、本調査の必要はないとの判断に至った。

⑬獣医学部受水槽建設予定地

▶予備調査期日/11月2日, 11月9日

▶面積/135㎡

▶方法・所見/積土の除去にまず重機を投入、後に人手による精査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

⑭札幌団地給水基幹整備・教養部体育館東側地区

▶予備調査期日/11月4日, 11月9・10日

▶面積/70㎡

▶方法・所見/まず、重機で積土等を除去、後に人手により精査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

⑮教養部受水槽建設予定地

▶予備調査期日/11月4・10日

▶面積/135㎡

▶方法・所見/まず、重機で積土を除去、後に人手により精査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

⑯札幌団地給水基幹整備・農学部西側地区及びボブラ並木南側地区

▶予備調査期日/11月14日～11月18日

▶面積/57㎡

▶方法・所見/手掘りによる試掘を行なったところ、遺構、遺物は検出されず、したがって本調査の必要はない、との判断に至った。

⑰中講堂建設予定地

▶予備調査期日/11月21日～12月8日

▶面積/1,456㎡

▶方法・所見/まず、重機で積土を除去した後、予定地内に4m×4mグリッドを設定し、各グリッ

写真-4a ボブラ並木東地区の遠景(南からみる)



写真-4b ボブラ並木東地区の予備調査



ドについて1m×1mのテストピットを掘削、遺構、遺物の有無を確認した。その結果、調査区の北西部を中心に、徳文時代の土器片22点、石器2点、銅片9点と遺構と思われる数箇所の黒色土の堆積を確認した。以上の結果にもとづいて関係機関で協議した結果、発掘調査が必要と判断され、次年度に全面調査を行なうことになった。

⑩ 学生部北西地区車庫建設予定地

- ▶ 予備調査期日/11月25日
- ▶ 面積/90㎡
- ▶ 方法・所見/予定地内にテストピットを掘削、遺構、遺物の有無を確認したが全く検出することが出来なかった。

⑪ 歯学部受水槽建設予定地

- ▶ 予備調査期日/12月7・9日
- ▶ 面積/135㎡
- ▶ 方法・所見/当予定地は、積土がみられたのでまず重機によってそれらの除去を行ない、後に人手による精査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

⑫ 薬学部危険薬品庫建設予定地

- ▶ 予備調査期日/12月12日～12月13日
- ▶ 面積/75㎡
- ▶ 方法・所見/まず重機によって積土を除去、後に人手によって精査を行なった。その結果、遺構、遺物は検出されなかった。

(3) 昭和58年度に工事中立会を行なった地区は、以下に示す16箇所である。

㊦ 電話ケーブル埋設工事関係

- ① 理学部/9月3・4・10・11日

㊧ 電気ケーブル埋設工事関係

- ① 文学部中庭/11月4日
- ② 理学部—農学部間/11月26日
- ③ 工学部/2月20日
- ④ 獣医学部/3月6日

㊨ 給水管理埋設工事関係

- ① 工学部触媒研究所関係/11月22日
- ② サッカー場/1月26日～2月13日
- ③ 理学部/2月13日
- ④ 薬学部/2月13・22・23日
- ⑤ 獣医学部/2月20日
- ⑥ 付属農場動物飼育室及び牛糞掘出路舗装予定地/2月21日
- ⑦ 低温科学研究所/2月22・23日
- ⑧ 薬学部付属薬草園/3月1・2日
- ⑨ 農学部/3月6日

㊩ その他

- ① 有害廃液処理施設増築予定地/1月21・22日
- ② 獣医学部汽缶室、焼却炉煙突建設予定地/2月20日

以上の工事現場は、舗装道路の積土や置土あるいは旧建物の基礎工事ですでに破壊が著しいところや、地層の保存状態が比較的良好でも、遺構、遺物は検出されなかったものである。(横山英介)

写真-5 医学部標本庫建設予定地の調査(南からみる)



第 II 章 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地区の調査

1-1 調査の概要

〈調査要項〉

- ▶ 遺跡所在地 / 札幌市北区北9条西7丁目
- ▶ 調査主体 / 北海道大学

▶ 予備調査期間 / 昭和58年7月11日～7月16日

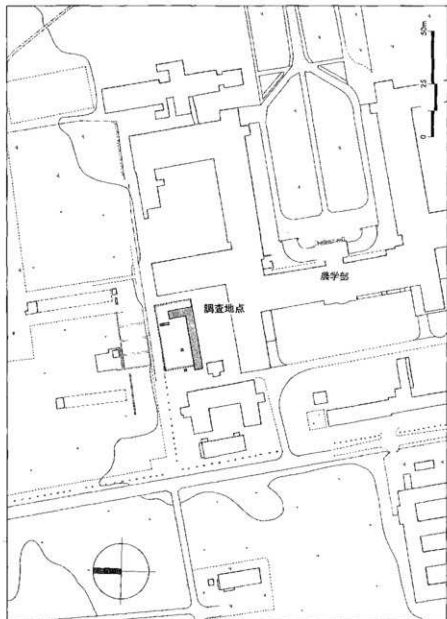
▶ 本調査期間 / 昭和58年7月25日～8月20日

▶ 発掘調査面積 / 377m²

▶ 調査員 / 横山英介(調査担当者)・松阿達郎

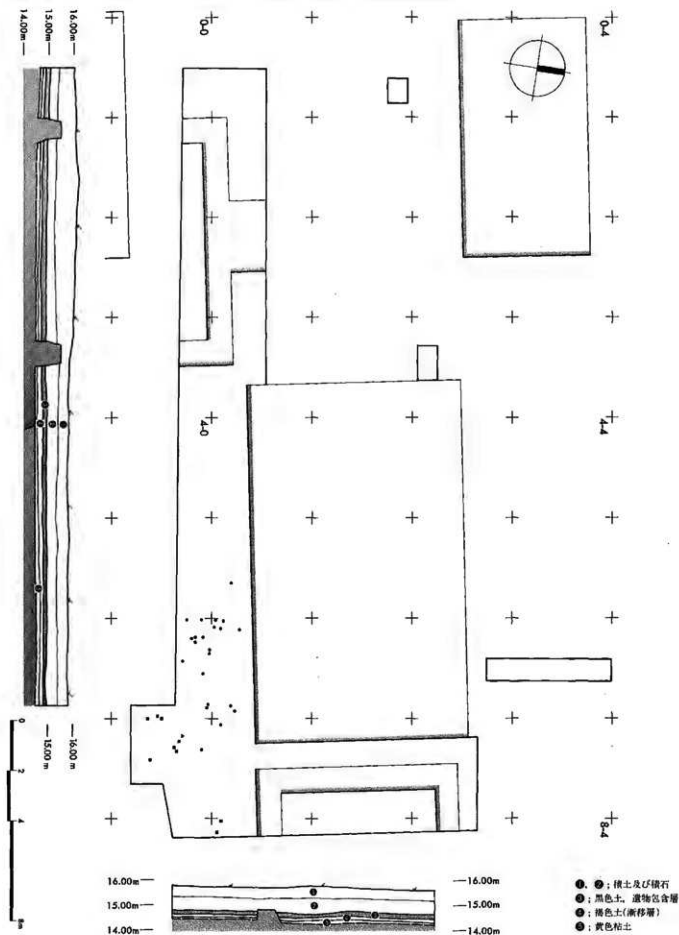
〈調査までの経緯及び方法〉

本学農学部西側(第3図)に農学部附属演習林実験研究棟を建設する予定があり、本地区における遺跡分布調査及び発掘調査を実施した。



第3図 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地の位置図

第4図 農学部附属演習林実験研究棟建設予定地の発掘区と遺物の分布及び地層状況図



本地区はサクシュコトニ川とセロンベツ川の両河川のほぼ中間で、本学構内では最も標高が高いところに位置している。又、過去の分布調査によって、本地区周辺から遺物が採集されていたので、分布調査は建設予定地区内全域を対象とし、テストピット、トレンチを設けて行なった。

調査により、調査区南側トレンチから猿文時代の土器片等の遺物が発見され、当地が古代の遺跡であることが明らかになると共に、その大半が地下室を持った旧建物の基礎によって破壊されていることが確認された。

上の結果にもとづいて関係機関で協議したところ、調査区内で自然層位が残されている南側・東側を対象として発掘調査を行なうこととなった。

調査に先だって、積土・客土を重機によって除去し、遺物包含層である黒ボク土以下を人手により精査した。

2 調査の結果

分布調査・発掘調査の結果、猿文土器小片26点、黒曜石剥片1点、碎片3点、軽石3点が発見された。遺構は発見されなかった。出土した遺物の一部を以下に示す(写真-7)。

1は、猿文土器・壺の胴部破片である。厚さ約10mm、胎土に砂礫、軽石片を含む。表面にはハケ目が残る。2、3は無文の胴部破片である。

写真-6a 農学部附属演習林実験研究棟予定地の遠景：写真奥中央の森



写真-6b 農学部附属演習林実験研究棟予定地の近景



1-3 小括

調査の結果、当地区は縄文時代の遺跡の一部であったことが判明した。ただ、先にも述べたように破壊がいちぢるしく、詳しいことはほとんどわからなかった。

(松岡達郎)

写真-6c 同発掘状況(東からみる)



写真-6d 同発掘の様子(西からみる)



写真-7 農学部附属演習林実験研究棟予定地出土の
縄文土器片



崎・岡田編：1983，P P 24—38)の対岸にあたるため，遺跡である可能性が高いと考え予備調査を行なった。

建設予定地区全面の積土・客土を重機を用いて除去したところ，現地表面下約4 mの自然層位中より遺物の出土を見た。その結果，作業を一旦中止し代替地を検討したが，代替地(2)からも遺物の出土を見た(写真-8)。

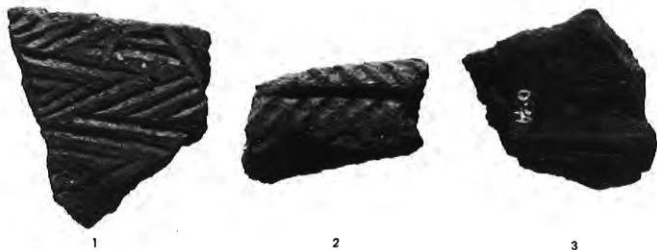
この時点で，これまでの分布調査結果に従い，関係者間で保存方法を含めて協議した結果，付近一帯に広範囲な遺跡の分布が予測されるため，適当な代替地を求める

ことは不可能であり，かつ工事による破壊が分布調査範囲以上には及ばないと判断から，当初の予定通り本地区を建設予定地とし，本調査を行なうこととした。

遺物包含層が現地表面より極めて深い所にあったので，本調査の対象となったのは，第6図に示すように，ごくせまい範囲であった。この内，遺物包含層が残っている部分について人手による精査を行なった。

(松岡達郎)。

写真-8 同地区代替地出土の擦文土器片



1-2 調査の結果

予備調査、本調査の結果、遺構は検出されなかった。

遺物は、弥文時代のもので、土師器環2個体分、壺5個体分、いずれも破損品もしくは破片である。そのほか使用又は加撃痕のある河原礫が2個出土している。

遺物の包含層は、地表下約4mの黄色粘土で、その上位には3枚の黒色土層がほぼ水平に堆積している(写真-9、10)。

以下に遺物の観察を記す。

▶土師器・環

全体の約1/3の破片である。製作にロクロ使用は認められない。体部は丸味をもって内湾する。外面はほぼ中程に横走る一本の沈線が巡る。底は平らで外面にはヘラ描きの木葉文が施文される。器面の調整は、体部外面沈線より上半でヨコ方向のハケ目、後にヨコ方向のヘラミガキが、下半から底部でヨコ方向のヘラミガキが施されている。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。法量の推定値は、口径158mm、底径60mm、高さ60mmである(第7図-1、写真-11-1)。

▶土師器・環

口縁部の小破片である。製作にロクロ使用は認められない。器形の特徴はよくわからない。口唇直下に横走沈

写真-9 栗半部受水槽建設予定地の地層(最下層の黒色ベルト直下が遺物包含層)



写真-10 同地区黒色ベルト直下から出土した壺の破片



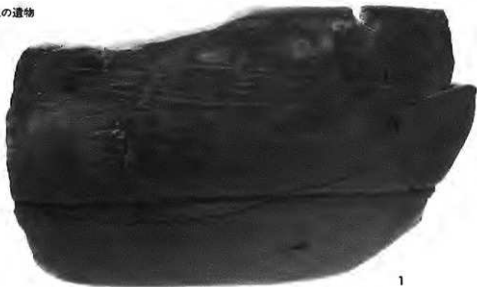
線が一本巡るようである。器面調整は、内・外面ともヘラミガキ、後黒色処理が施されている。ただし、内面はミガキ以前にヨコ方向のハケ目調整が施される(写真-11-5)。

▶ 擦文土器・甕

中形。頸部と胴部は沈線および押し引きによる爪状文により区分される。頸部はゆるやかに外反し平坦な口唇

部に移行する。胴部はやや長めである。文様は先に述べた沈線、爪状文のほかに口唇部直下に円形刺突文が施される。器面調整は、外面頸部がタテ方向のハケ目、胴部がタテ方向のハケ目→ヘラミガキ、内面がハケ目→ヘラミガキである。法量の推定値は、口径237mm、胴径182mm、高さ170mm以上、である(第7図-2, 写真-11-2)。

写真-11. 薬学部受水槽建設予定地出土の遺物



▶ 炭

胴部下半から底部にかけて残された破損品。底部は多少外側に張り出す。

胴部外面の調整は、タテ方向のヘラケズリが顕著であり、底板との接着部にはハケ目痕が部分的に認められる。底外面にはササの葉の圧痕を留める。内面はよくヘラミガキが施される。炭化物が付着し黒色化している。第7図-2と同一個体の可能性もある。底径74mm、現存高さ70mm。(第7図-3、写真-11-3)。

▶ 炭

底部破片。底部はやや張り出す。底外面に木葉痕を留める。わずかに残された胴下半部の調整は、外面がハケ

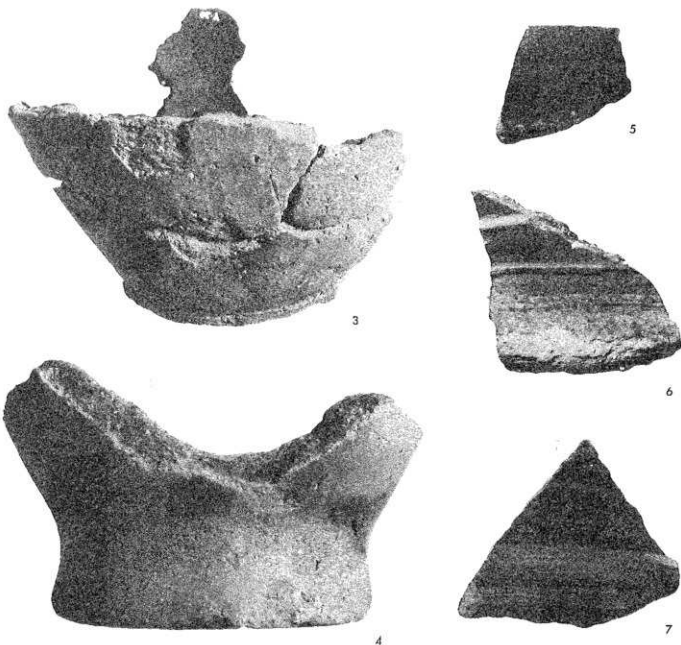
目であるが内面はよくわからない。底径58mm、現存高42mm。(第7図-4、写真-11-4)。

そのほかに胴の頸部の小破片がみられる(写真-11-6、7)。いずれも横走沈線を施文するものである。

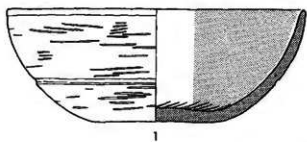
▶ 使用痕もしくは加撃痕のある河原礫(第7図-5.6)。

いずれも扁平な安山岩の河原礫を素材とする。5は片面の一方に敲打痕があり台石であろうか。長径193mm、短径137mm、厚さ72mmである。6は片面に炭火付着物がみられあるいは炉石かカマドの芯材として使用されていたのだろうか。現存長径131mm、短径105mm、厚さ38mmである。

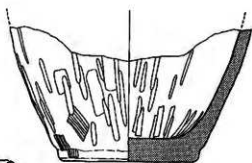
(松岡達郎・横山英介)



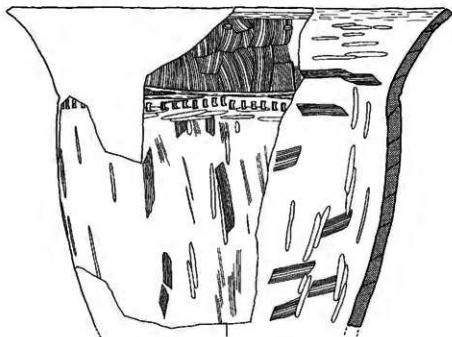
第7図 菟学部受水槽建設予定地出土遺物



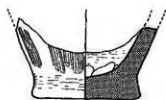
1



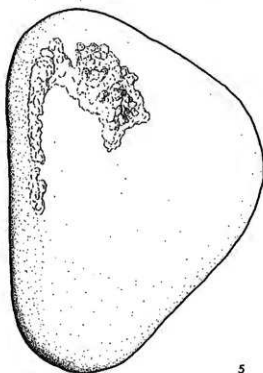
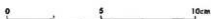
3



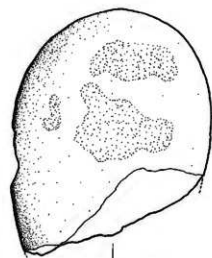
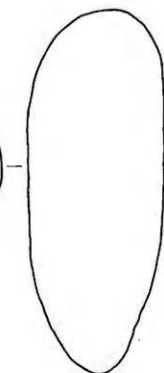
2



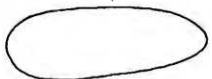
4



5



6



3 小括

当地点は、サクシュコトニ川の右岸に相当し、遺物包含層の標高は約11mである。土師器などの遺物は、現地表面（標高約14～15m）からおよそ4mもの深さの粘土層から出土した。この地層は、南西つまりサクシュコトニ川へ向って傾斜して堆積しており、遺物が出土した地点は当時の川岸にはば接した所と考えられる。

遺物は、同一層位内から、あるまじりをもって出土しており、したがってその共存関係の成立はほぼ間違いないものと思われる。とすると、土器の組み合わせにひとつの特徴を指摘することができる。つまり、坏を中心とした土師器の組み合わせに、第7図-2、写真・11-2の文様を有する甕が組み込まれている点である。

この種の甕の文様要素一円形刺突文や爪状文などは、統縄文時代末葉の土器を飾る文様要素としてしばしば「北大式」土器と称されて来たものである。しかし、この甕の器形・器面調査技法などは土師器甕と共通してお

り、出土状況からみても共存関係にあったので特に区分して考えることは出来ない。

さて、この組み合わせを有する土器群の編年上の帰属だが、いまのところ定説があるわけではない。上げて上げるとすると横山の提案した「縄文時代前期のうちのⅢ期」の土器群（横山：1984）に比定し得る。つまり、9世紀初頭から中葉にかけての時間幅で行なわれたものと考えることが出来よう。そのように考えると、先の甕一円形刺突文や爪状文を有する甕は「縄文土器」の範疇に入るもので、この種の文様は統縄文末葉の土器からの伝統をとどめるもの、と解釈することが妥当であろう。

調査区域が狭いこともあって、遺跡そのものの性格等は不明であると言わざるを得ないのが現状である。川岸近くの作業・工作場あるいは居住区からの産品投棄場等の可能性も一応考えることが出来よう。その解明には、当地域をより広範囲に亘って調べる作業が必要であることは勿論だが、当地の北東側に広がる高位平坦地における集落の確認と、その調査が重要な意味を有するものと考えられる。

（横山英介）

まとめ

昭和58年度中にボーリングあるいは発掘の実施された地点が19箇所、このほかに工事立会が19回におよんだ。多数の建設工事が持たれた割には、前年度までのような大面積の掘削を伴うものがなく、しかも遺跡集中地区でなかったことは、幸いといえる。しかも、小規模のボーリングおよび立会の地点が、北海道大学札幌団地一帯に広がっているので、地下の状況を把握するための基礎資料がかなり入手された。まだ、全学の遺跡分布を正確におさえるにはほど遠いが、今後の建設計画を考えるうえに、重要な一歩を踏み出したことになろうか。

第三章で報告されている『薬学部受水槽建設予定地』は、58年度に実施された調査地区のなかで、もっとも重要視されていた場所である。その理由は2つあった。まず、遺跡の存在がほぼ確実視されていたこと。それと破壊と位置の変動の激しいサクシュコトニ川の旧流路の一部が、この地点の試掘ではっきりする可能性がある、と考えられたからである。旧流路が確認されれば、この周囲の遺跡の立地を推定する上にもっとも重要な手掛かりが得られる。

試掘調査の結果、この地点は、古い粘土が厚く積みあげられており、地表より3.5メートル程掘り下げて、擾乱を受けていない自然層準に達することが判明した。さらに、そこから50センチメートルほど下位で、若干の遺物の出土することが確認できた。調査開始の際にもたれていたもう1つの目標、旧流路の決定は、調査地点の範囲が限定されていたこともあって確定には成功しなかった。しかし、自然層位の傾斜などからみると、この区域から数メートル以内に位置するであろうと推定できる。

『薬学部受水槽建設予定地』から検出された遺物は、北海道の考古学者の間で、いわゆる北大式Ⅲとよばれているものである。資料点数は十分とはいえないが、本文でも述べているようにいわゆる土師器と一括で発見され、その胎土や焼成からみても異なった土器型式の共存関係と判断する理由がみあたらない。このことは河野広道によって北海道大学の構内から最初に確認され（河野1933）、それ故に北大式の名称を付されているこの不明瞭な土器群の性格を、再検討するための手掛かりを提供するものであろう。（吉崎昌一）

■北大埋蔵文化財調査組織

- ▶プロジェクト・チーム・メンバー
吉崎昌一 文学部助教授（室長）
岡田宏明 文学部教授
岡田淳子 文学部助教授
林 謙作 文学部助教授
菊地俊彦 文学部助教授
- ▶埋蔵文化財調査室
横山英介 講師

〈引用・参考文献〉〔アルファベット順〕

- ▶河野広道/1933 捺紋土器群 北海道原始文化聚英
- ▶横山英介/1984 北海道におけるロクロ使用以前の土師器—縄文時代前期の設定— 考古学雑誌 第70巻 第1号
- ▶吉崎昌一・岡田淳子編/1984 北大構内の遺跡〔3〕 北海道大学

北大構内の遺跡

4

昭和58年度

昭和60年3月20日発行

発行所 北海道大学
札幌市北区北8条西5丁目

編集者 吉崎昌一

デザイン 桜井雅章

印刷所 (株)北海道機関紙印刷所
札幌市北区北6条西7丁目



北大附近の赤外線カラー写真

北海道大学